



Title	コレクション中川4：強いとか、弱いとか、いうこと
Author(s)	中川, 雅道
Citation	臨床哲学のメチエ. 2014, 21, p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/40506
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

強いとか弱いとか、いうこと

中川雅道

きつい西日が我々を照らし、そのあまりの直截さが、その場の抜き差しならぬ空気を強調していた。平日の夕方の教室で彼と私はしばらく黙ったまま座っていた。困ったことに、私はそこでは教師なのだ。そして、彼はいじめられ、ひどく傷ついている。なんとかしたいという気持ちと、なんともならないという気持ちが混じり合い、私は彼にかける言葉さえ見つけることができない。彼はゆっくりと切り出した。「先生、どうやつたらいいじめられなくなるんですか?」どうやつたらいいんだろう、それは何度も何度も自分が辿った道だった。一般的な解決法があるのなら、教えて欲しいくらいだ。

その時に漸く、私は自分の話をしようと思いつ立った。傷ついた過去の経験について話したいとは思わない。尋ねられたとしても、ほとんどの場合、話さないと思う。その記憶はあまりに生々しく、思い出し、語るたびに自分を傷つけることになるからだ。しかし、私は話さねばならなかった。私だけは、彼の今居る状況を作り出してはならなかつたはずなのだ。それなのに、私は……。自分に失望しながら、昔の話をし始めた。おれも、いじめられていたことがある……。



小学校低学年のころ、女の子と「あやと

り」を必死でやっていたぼんやりした記憶がある。外にはあんまり出なかった。その傾向は、ゲームばかりするようになってさらに加速した。そんなこんなで、どんどん太っていき、ヘビーな体重になった。小学校四年生のとき、星のカービィとかドラゴンクエストのスライムの絵を描くのが好きで、休み時間になるたびに、友だちと二人、教室で絵を描いて楽しんでいた。でも本当は、絵を描く楽しみはちょっとだけで、休み時間が怖かった。

いつもどおり、ノートに色ペンでキングスライムを書いていたら、教室の入口の辺りから呼びかけられる。「ゴリラ!」また始まった。誰のことをゴリラと言っているのか明らかだ。とりあえず、我慢してみよう。「ブタゴリラ!」最初に挑発してきた声を周りの奴らが聞いていて、挑発する人数が増えていく。自分を囲むあの顔は忘れない。軽蔑の薄ら笑いと、さあ楽しいことが始まつたぞという表情。「分かってるだろう、我慢しておかないと、またひどいことになるぞ」という気持ちと「こいつらを一度で良いから力一杯殴ってやりたい」という気持ちがせめぎ合う。声は、もはや机のすぐ前にまで近づいていた。「うるさい! 黙れ!」ゴリラと嘲笑され、いらだつのなぜだか分からなかった。教室にはご機嫌におしゃべりをしている人たちもいる。周りで見てる人たちに「こいつ弱虫やな」と思われている気がした。嘲笑は続く。

ある一点で、卒然、自分のプライドがその状況を許せなくなる。「お前ら、ふざけんなよ！」叫びながら、走り出す。いきなり走り出したら、もしかしたら捕まえることができるかもしれない——殴ったる、絶対殴ったるからな。——もう、その時には目には涙が溜まっていた。追いかけなくとも情けない。追いかけ始めるとなお情けない。さらに悲しいことに、クラスで一番足が遅かった。



四人くらいを追いかけて走る。追いつけるはずなんかない。泣きながら走る。ゴリラ！という声は続く。届かない。教室から始まつた闘いは、職員室を除いたすべての場所に延びていく。中庭を走り抜ける。白、赤、黒の鯉たちが悠然と泳ぐ池のある中庭。下級生たちもところどころで遊んでいる。その中をゴリラと馬鹿にされながら走る。妹も混じっているのかもという不安は常にあった。両側に校舎があり、どこからでも丸見えだ。兄貴も見ているかもしれない。給食室の前を駆け抜けて、図書室で相手を追い詰める。がたん！と扉を押し開けて入ったので、図書委員の下級生たちが驚いている。本を読んでいる人たちのたくさんの視線を感じながら、追いかける。机をうまく利用して逃げられる。相手が押しどけた机の角が太ももに直撃する。「足おそ！あほちゃう！」そのまま、どこへいったか分からぬ。誰もいない校舎の裏を奴らを探して歩き回る。感じていたのは、恥だった。なんて自分は弱いのか。どこをとっても

弱い。しかも、それをみんなに見られてる。追いつけない。おれは誰にも追いつけない。チャイムが鳴って、教室に戻る。そこにはいつもどおり賢く整列した奴らが、にやにやして待っている。授業が始まつたら、お互いに手出しができない。そんなことがほとんど毎日続いていたと思う。人間はすごいもので、その時期の記憶はほとんど残っていない。



なぜあんなにすぐ涙がとまらなくなつたんだろう。涙は悲しいときにだけ出るわけではなかった。恥ずかしいときにもすぐに目が真っ赤になつた。先生に当てられて発表したのに間違っていたときに涙が流れた。腹が立つて、怒りが止められないときにも、涙が溜まり始めた。涙が出る度に思ったことは、自分はだめな奴なんだということだった。周りのみんなが強く見えた。自分だけなぜこんなに弱く生まれたのか、親を恨んだ。



「いじめを苦にして自殺」という報道が盛んにされていた。そのときに、ああ、そうか、おれもいじめられているのか、とすんなり納得してしまつた。その日、赤い国語辞典が机の上になかつた。さっきまであつたはずなのに。どこにいったんだろう。頭が混乱して、涙が止まらなくなつた。どうも叫んでいたらしく。「なんで、おればっかり。なんで、おればっかり」。だんだん、舌がまわらなく

なっていく。周りの人たちの困ったような顔と、なんやこいつという視線が刺さる。どうも後ろの奴が借りていただけだったらしい。そんなつもりじゃなかったという顔に向かって「お前が、お前が」と泣きながら、訳の分からぬ言葉を繰り返していた。すまんかったという声が耳に入らず、お前のせいやと叫んでいた。チャイムが鳴った。泣いている姿を誰にも見られたくなかつた。なんとか涙を拭いた。先生が入ってきたとき、何もなかつたふりをした。ただ、目は真っ赤だつたはずだ。



そういえば、担任の先生から会議室に呼び出されたことがあった。誰がチクったのか、奴らといっしょに昼休み、呼び出された。どんなことを言われたり、されたりしているのかと取り調べられた。そのときに感じていたことは、先生に助けてもらえそうだ良かつたとか、これで楽になるかもしれないとかいったことではなかつた。ただただ恥ずかしかつた。終わることのない恥の感覚。「ゴリラと言われます」。ほとんどそれしか言わなかつたような気がする。弱虫だということが先生にもばれてしまった……先生にも馬鹿にされている。もしかしたら、親にもばれているのかも。兄貴にも、妹にも。弱い自分が悪いのに、という罪の意識が自分を捕らえて放さなかつた。奴らに謝られた気もするし、謝られなかつたような気もする。ゴリラという嘲笑が、止まるはずなどなかつた。



ひどく晴れ渡っていた、と記憶しています。猫背でとぼとぼ歩く、あまり人通りのない時間帯の家へと戻る道。記憶の中では、そんなときには限って誰とも帰らず、牛の匂いが鼻につく道を歩いているのです。足下を見ながら歩いていると、今日もまた学校で涙を流してしまつたことが、忘れられない。ただ、恥ずかしかつた。もしかしたら、誰かが家族に「今日もいじめられてたみたいだよ」と伝えているかもしれない。そう思うと、家にも居場所がないような気がして。

狭い路地を通り、国道に抜けた後、工務店の横に高いビルがありました。家からも足が遠のく日には、自販機を見るふりをして、そのビルの屋上を見ていました。とてもなく、高かつた。そして、そこから飛び降りて、ぐしゃっと潰れてしまうことを夢見ていました。死の可能性について考えることは、とてもない不孝をしているような気がして怖かったけど、自分を拒絶する世界に復讐できるかと思うと、とても快かったです。



中学生になって、色々なことが変化した。中学校は、四つの小学校がひとつになるマンモス校だった。自分のことを知らない人がたくさんいた。初めてのホームルームで、グループ活動をしていたときに、あだ名を決めようと誰かが言い出した。じゃあ、全員ドラ

えもんのキャラで統一しようぜ、誰かが言った。じゃあ、中川君は大きいからジャイアンでいいこうか……。名前は人を変える。のび太くんからジャイアンへ。いじめられっ子からいじめっ子に立場を強制的に変えられたその瞬間、目の前に可能性に満ちた世界が拓けた。

笑われたくないから、ゴリラと言われて怒って走り回っていた。いいじゃないか、笑われれば。開き直って、腹を抱えるくらい笑かしてやればいい。「ゴリラ！」と言われたら「ゴリラの握力なめんなよ！」と答えるようになった。「テンパ！」と髪質を馬鹿にされたら「おいおい、試しにベン差してみろよ。微動だにしないから便利やぞ！」と答えるようになった。どのリアクションも、ことごとく笑いを引き起した。そんなことをしていたら、気づいたらクラスの中心にいた。うれしかった。自分がそこにいてもいい、ということが認められたような気がした。

通学路が長くなったので、毎日、汗だくで歩くようになった。日ごとに身体が締まつていった。部活を始めた。筋トレをしたり、外周を走ったり、そんなことをしての内に、自分が意外と足が速いということに気づいた。腹筋が割れ始めたあたりで、ほんやりとした自信が確信に変わった。もしかしたら、強くなれるのかもしれない。



小学校のときに自分を挑発していた連中ももちろん中学にいた。生徒数が多く、大きな学校だったので必然的に会う機会も少なく

なっていった。ある日、渡り廊下で、奴らのうちの一人とばったり出くわした。秋口で、夏から残された日差しが渡り廊下を截然と照らしていた。何を思ひだしたのか、奴は微笑を顔に浮かべ、以前と同じ表情で「ゴリラ！」と言い放った。腹が立ったわけではなかった。恥に押しつぶされたわけでもなかった。

周りには誰も居ない。今ならいけるかもしれない。思った瞬間に走り出していた。皮肉な微笑を残したまま、奴も逃げる。易々と、相手との距離が縮んでいく。夢にまで見た、手が届く距離に詰め寄ったとき、背中を強く、世界に復讐するように強く押した。相手は足がもつれ、倒れ込む。捕まえた。まるで百年もこの機会を狙っていたように、獣のように襲いかかる。「すまん、すまん。もう言わへんから」。謝ってもらいたかったのではない。何も言わず、溝うちに一発、くれてやった。苦しそうなうめき声。てっきり嬉しいとばかり思っていた。誇らしいとばかり思っていた。自分を挑発する相手を殴り飛ばし「おれのほうが強い」と突きつけること。そこには何もなかった。無意味、それだけが待ち構えていた。残骸を後に歩き始めたとき背中に捨て台詞が届いた。「足が速くなったから、もうからかえへんな」。「からかう」という言葉が耳についた。



話し終えたとき、窓の外は漆黒の闇に閉ざされ、世界は暗闇の底に沈んでいた。私はいじめを受けていた人を代表したつもりだつ

た。しかし、本当にいじめられていたんだろうか。その疑問は誰に届けたらいいのか分からぬまま、その場に捨てられていた。彼は私の話に、どんな反応も示さず、ただじっと君を凝視している。その目はこう言っている。
「なぜ、先生は僕がいじめられているのを止めてくれなかったのか？」彼と、私との間には、深く、無限に続く深淵が口を開けていた。誰かがいじめられている。それを止めることができない無力さ。深く傷ついた人を受け止めることができない無力さ。そして、いじめられなくなつた成功者を気取ることしかできない自分の矮小さ。やっぱりおれは弱いままだったんだと、永遠に続く沈黙の中で、そう思った。

——どういうことなんだろうなあ。一体、強いとか、弱いとか、ということは。——

中島敦『虎狩』